



Title	初習外国語としてのスペイン語の授業や教材のあり方と、社会や文化に関する理解について：学生の要望や教科書の使い方の分析
Author(s)	岡田, 敦美
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 64, 21-37
Issue Date	2013-03-27
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52628
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	bulletin (article)
File Information	02_OKADA.pdf



[Instructions for use](#)

初習外国語としてのスペイン語の授業や教材のあり方と、社会や文化に関する理解について —— 学生の要望や教科書の使い方の分析

岡田 敦美

〈はじめに〉

大学における初習外国語科目のあり方については、様々な議論がなされてきたが、いわゆる大綱化¹以降の「初習外国語教育の（存続の）危機」論に駆られた議論——初習外国語の必要性に関連する論議はその一つであろう——は後退し、近年ではヨーロッパにおける大学改革の動向が紹介され、広く議論されるようになってきている。ヨーロッパ言語共通枠(CEFR=Common European Framework of Reference for Languages)²を日本の教育現場へ（部分的）導入する可能性に関する研究はその代表的なものであり、スペイン語教育についての研究も例外ではない³。もちろんそのほかにも授業運営や教授法、教材に関する議論、コミュニカティブ・アプローチの是非などに関する多くの研究がなされている⁴。また、欧米人学生と言語的、文化的に異なる背景を持つ日本人学生の適性に合致した学習ストラテジーをたてるべきであるとした、適性に関する実証研究もある⁵。

本稿は、まず第一に、北大独自の統一教科書の作成という具体的な目的のために、学習対象者である北大生の学習のしかたや教科書の使い方を、学生へのアンケートとその分析により明らかにすることを目的とする。本稿の第二の目的は、授業や教科書で扱ってほしいと学生が思っていることは何かを問う学生へのアンケート調査とその分析により、言語運用以外の、言語の背後にある文化や社会的側面に、授業や教科書でどこまで踏み込み、どう教えるべきかという問題を、明らかにすることにある。

-
- 1 1991年の大学設置基準の改正において、科目区分に関する拘束が緩和されたことを指す。これにより、教養科目、特に初習（初修）外国語、即ち第二外国語のスリム化や自由選択化が広がる可能性とその是非が議論された。
 - 2 吉島茂ほか訳（2004）；ウルリッヒ・タイヒラー（2006）；フリア・ゴンサレス他（2012）などがある。
 - 3 江澤照美（2010）；寸田知恵（2010）などがある。
 - 4 中島さやか他（2011）；Aristimuño（2010）；福嶋（2003）によるスペイン語教育教授法の変遷に関する詳細なサーベイがある。
 - 5 Martínez Martínez（2001）；Aristimuño（2010）。

なお、北大における語学教育の現状やその成果、なかでも初習外国語を履修している学生の意識調査は、既に2002年に既存の初習外国語科目について行われ、その成果が刊行されている⁶。しかし当時はスペイン語は初習外国語として開講されていなかったため、スペイン語に関する調査研究が期待されるところである。

2002年の北大初習外国語に関する上述の先行研究は、北大生は初習外国語の授業があることを肯定的に考えていることや、初修外国語の授業に期待していることは、教養を身につけること、「異文化理解」のためであることを示している。しかしスペイン語教育については、江澤が指摘するように、「文化について何をどう教えるのか日本のELE(筆者注=外国語としてのスペイン語)教育界ではまだ十分な議論が行われておらず(途中略)、ELE教育者にとって文化は今後の課題として残されている重要なテーマとなっている」のが現状である⁷。学生が語学の授業を通して「教養」を獲得することや「異文化理解」の進展を期待しているとすれば、期待される教養の内実や、異文化理解に資する題材を教材や授業の中においてどのように扱うべきかを、より掘り下げることが望まれる。またそもそも学生が、勉強する際に、普段どう教科書を使い、使いながら各セクションの内容や形式についてどう感じているのかは、今まで主体的に取り上げられることがなかった。

本稿では、これらの点を明らかにするために行われたアンケート調査の分析に基づいて、初習外国語科目としてのスペイン語の教科書の在り方を考察する。なお本研究は、北海道大学の全学教育科目の一つである初習外国語履修者への調査を基にしたものであるため、ここで明らかになったことが一般化可能であるか否かは、他の教育機関における研究との摺合せにより今後、少しずつ明らかにする必要がある。

〈1. 北海道大学における初習外国語科目としてのスペイン語〉

北大では、2006年度まで、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語の4言語のみが初習外国語科目として開講されていた。2007年度以降、それら4言語に加えてスペイン語と韓国語が初習外国語に加わり、北大のすべての学部の全ての学生は、これら計6言語から1言語を選び、大学一年次に週2コマのペア授業を2学期間(1年間)、計4単位分を履修しなければならない。そのほか、文系諸学部の学生は、初習外国語として選んだ外国語と同一言語の「外国語演習」を、選択科目として週1回半期(15回)の授業を二つ、計4単位(外国語演習の場合、週一回半期15回で2単位与えられる)履修しなければならない。また理系学部の学生の場合は、医学部医学科の学生は初習外国語と同一言語の外国語演習を2単位、保健学科及びその他の理系学

6 佐藤俊一ほか(2002)。

7 江澤照美(2010)、pp.223-224。

部の学生は、英語とあわせて外国語演習を2単位履修しなければならないことになっている。

初習外国語科目のうち、旧来から初習外国語科目として開講されていたドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語では、後期2コマの授業のうち1コマがCALL (Computer Assisted Language Learning) 授業となっており、ティーチング・アシスタントによるサポートのもと、ウェブ上に用意された教材に各自が取り組み、解答をウェブ経由で送るというシステムで、様々な練習問題（オーディオ教材を含む）をこなしている。言い方を変えれば、「伝統的」な、教員が指導者として教場にいる対面授業は後期は週1コマのみになっている。スペイン語の場合は後期にも週2回の対面授業があり、他の外国語科目のCALL授業にかわってネイティブ教員による授業が全クラスに提供され、週1回の日本人教員の授業と連携して、同一の教科書を教材に、担当箇所を分担しつつ授業を行っている。

現在、週1回の授業で用いている教科書は、エウヘニオ・デル・プラド／斉藤華子／仲道慎治著『スペイン語のリズムで』（同学社）であり、2007年の発行から既に4版と版を重ねて、広く受け入れられているものである。この教科書の構成は、以下のようになっている。各章の最初の2ページは、「文法(Gramática)」で、もっぱら文法説明のみに費やされる。次の1ページは「練習問題(Ejercicios)」で、通常大きな3つの問題から構成される。最初の二つの問題は、それぞれがその章で扱った二つの文法事項に対応しており、ふつう、それぞれの問題は、5問程度の穴埋め小問から構成される。従って穴埋め問題は計10問ある。3番目の問題は、その章で扱った文法事項全体に対応するスペイン語作文であり、各章に10問ある。一問が2文から構成されている場合もある。次の1ページは、「ダイアログ(Diálogo)」であり、ダイアログ形式を取りながら、スペイン語圏の文化や社会についての知識を提供する購読に似た内容となっている。続く1ページから2ページは、「口頭練習(Práctica Oral)」であり、その章で習った文法事項や重要構文を、コミュニケーションの場面や状況を想像しながら口頭練習することになる。与えられた情報ギャップのあるカードに即して、問いに答えたり、自分のことについて答えたりするのが典型的な形式である。このように、各章はそれぞれ計5ページから6ページでの分量であり、4つのセクションから構成されている。なお、コラムなどの囲み欄は無いが、巻末の付録教材として、補足的講読教材が7つある。

既に述べたように全クラスにおいて最低でも後期の1コマが、ネイティブ教員による授業となるカリキュラムとなっている以上、このカリキュラムと整合性のある教科書として考えられるものの一つは、『スペイン語のリズムで』同様に、口頭によるコミュニケーションの練習が組み込まれた教科書だと考えられる。そこで、その点を念頭におきながら、現在使用中の教材を学生がどう使い、使い勝手をどう感じており、教科書についてどのような要望があるのか、などを明らかにするための予備的アンケート調査を学生対象に行い、その結果を北大独自の初習スペイン語の教材の方向性を決めていく上での一助とすることとした。実施したアンケートは、以下の2つのものである。一つ目は、『スペイン語のリズムで』を用いて一年間の勉強を終えた

年度末の時期に行ったアンケートで、上述教科書の4つのセクションそれぞれを、学生がどう受け止め、どう学んだのかを問うことを目的として、無記名で行われた(平成24年1月)。また、二つ目のアンケートは、新年度に授業が始まって5～6週間が過ぎたところ(平成24年5月)に、新入生に行われた。このアンケートの目的は、必修科目である初習外国語科目「スペイン語」の授業で、教科書で扱ってほしいと学生が思っていることは、言語的な知識の教授ばかりなのか、それとも社会や文化に関する知識や見方に関する内容を含むのか、を問うことであった(なおこの他に、筆者がほぼ毎年行っているアンケートとして、4月の初回の授業で新入生に行うアンケートがあり、スペイン語を選んだ理由などを問うている)。

次節(第2節)では、一つ目のアンケート、即ち、現在使っている教科書に関する質問を中心としたアンケートに基づいて、1年間の学習を終える頃に、学生が、一年間、教科書をどのように用いて勉強してきたのか、及び授業内容に関する要望を考察する。第3節では、二つ目のアンケートをもとに、学習を始めたばかりの学生が、授業内容にどのような要望や意識を持っているのかを考察する。

〈2. 学生は、教科書の各セクションをどう用いているか〉

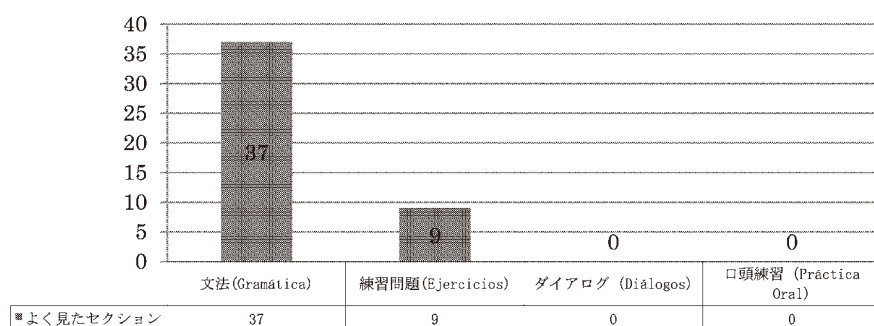
語学の授業のあり方、教える内容に関する指導者側の意見は様々であるが、近年は、場面シラバスによって、実際の会話の場面をまず与え、そこで用いられるセンテンスや表現を導入してから文法事項に入ってゆく教科書の作り方もみられるようになってきた。またそれと並行して、実践的なコミュニケーション能力、特に話す力、聴く力に重きを置き、従来よりも日常生活に必要な語彙を重視し、文法事項(特に時制)は従来よりも量を制限するべきであるとの考え方が、ネイティブ教員を始め、上述のCEFRの基準の導入を検討すべきと考える日本人教員を中心に、支持あるいは検討されつつあるように思われる。

周知のように、必修として全員が履修する初習外国語の授業内における学習時間は、せいぜい週二回の授業が一年間で、合計(1.5時間×2回×30週=)90時間であるから、必修授業内での学習だけで日常的な口頭の意味疎通能力を学習者が身に着けるのは、学習対象言語が母語である日本語と系統の異なる言語の場合は特に難しい。が、言語を恰も文字による記号体系かパズルのように捉え、言語が音として存在し、文脈の中で意味を持ち、意思疎通の手段であることを忘れがちな学生にとっては、音として言語を捉えることが必要な口頭練習によってこそ、そのような認識を切り替えることができる機会となる。しかしながら学生がその点をどう認識しているのかは明らかにされてこなかった。

そこで、一年間の学習をほぼ終えた学生へアンケートを行い、上述の教科書(『スペイン語のリズムで』)の各セクションを、学生は、どのように使って学習し、それぞれのセクションについてどう考えているのかを、無記名アンケートで調査した。なお、学期末(2011年1月)の授業

運営の都合により、たった1クラスに対してしかアンケートを実施することができなかった。より多くのデータを収集することを今後の課題としたい⁸。

1. 教科書は、文法 (Gramática)、練習問題 (Ejercicios)、ダイアログ (Diálogos)、口頭練習 (Práctica Oral) の4つのセクションで成り立っていました。あなたはどのセクションを最もよく見ましたか (勉強したり参考にしましたか) ?



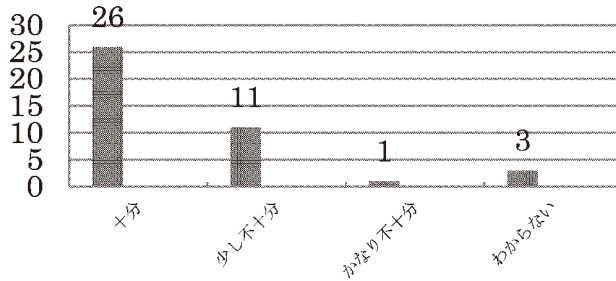
既に述べたように、後期には全クラスで、週2コマのうち1コマをネイティブ教員が担当し、教科書の後半部分、即ちダイアログと口頭練習の部分を担当している。教科書の口頭練習の部分は、その章でポイントとなっていた文法事項(例えば、時制とその活用、場所の表現、など)の練習をペアで行うもので、モデル(例)が与えられたあと、同じようなやり取りを、情報ギャップのある教科書上の2枚のカードをもとに行うものが典型的である。文法のページに続く練習問題の典型的なものが穴埋め問題であるのに対し、この口頭練習の箇所では、単語で与えられた情報を文章に直し、口頭でペアワークの相手に伝えることになる。新出単語はほとんどなく、各章2ページからなる文法のページで出てきた文法事項のうちでもポイントとなるような重要構文を、口頭で練習する問題とも言える。しかしながらアンケートの結果から分かったのは、学生は、教科書の口頭練習の部分を、少なくとも参照箇所としては、全く重視していないということである。とはいえ、活字で書かれた練習問題を解く際であれば、口頭の練習をする際であれば、練習問題を解くために、その都度、開いているページから前にページをめくり、文法ページを「ちら見」する学生が何人もいるという教育現場の実情からすれば、口頭練習 (Práctica Oral) の箇所が学生にとっては多少「厄介」であることは想定済みで、さほど違和感のない結果であるとも言える。

母語と全く系統の異なる英語のような外国語を、現地ではなく日本で学ぶに際して、直観や暗記ではなく、論理的、体系的に学習した学習経験を持つ大多数の北大生の場合、文法を足が

8 なおアンケートの項目によって回答数が異なるのは、回答者全員が、全ての項目に回答したわけではないためである。

かりとして外国語を学習しなければ中級レベルから先に行って伸び悩むと考える傾向があるのは不思議ではない。各章を実質的に集約する基礎知識が文法のページにあることを考えると、最もよく参照するページとして文法のセクションが挙げられることに異和感はない。教材作成に際しては、学生が凝視するページは他でもない文法のページであることを念頭に置き、文法事項のわかり易い説明や配置を心がける必要があるだろう。

2. 教科書に載っている練習問題の量は十分でしたか？



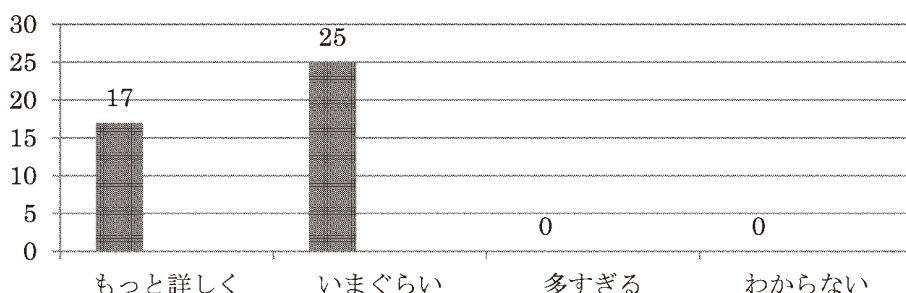
この項目では、練習問題が多すぎるかどうかを問う選択肢は用意しなかった。その理由は、①常日ごろ、教科書以外に、個人的に勉強するための問題集を推薦してほしいという質問が多く学生から寄せられること、②これらのリクエストに応えるために、授業内に教科書以外の問題集を任意の補助教材として紹介してきた事情があること、③そのため例年、定期試験前には、時間が許す限り教科書の練習問題に加えて追加の練習問題を与えて解いてきたこと、が挙げられる。どちらかという練習問題が不足気味なことが明らかと思われたため、現状の各章1ページのみの練習問題が多すぎるかを問う選択肢は不要であると事前に判断した。

既に述べたように、通常、筆記式の練習問題のページでは、大きな問題の1番と2番が、それぞれ異なる文法項目を扱い、それぞれ5問程度のカッコ埋め形式の小問となっている。このような形式、問題の分量は、日本で出版されている伝統的な教科書では一般的なものである。大きな問いの3番目は、通常合計10問のスペイン語作文から構成されている。この分量ではせいぜい新しい文法項目のしくみを理解したかをチェックすることしかできず、練習としては不足するのではないかと思われたが、過半数の学生は十分であると考えている。

しかしアンケートの質問は、教科書の「エヘルシシオス (Ejercicios=筆記式練習問題の箇所)」が十分であるか聞いているのではなく、「練習問題全般」の量を聞いているため、学生は、口頭練習と併せた練習問題の十分さについて回答したとも考えられる。既に述べたように、筆記式練習問題の他に「口頭練習 (Práctica Oral)」が各章1ページあり、ダイアログのページと併せて週1時間の時間を割いて練習を行っているが、口頭練習のページは、「練習問題(Ejercicios)=筆記式練習問題」以上のボリュームがある。ここで基本的な構文を何度も口頭で言って、覚えるぐらい練習するようになってきているため、練習問題の分量が、トータルとして、不足

と感じられなかったのだと結論付けることができるだろう。

3. (教科書の) 文法の部分の説明は十分でしたか？



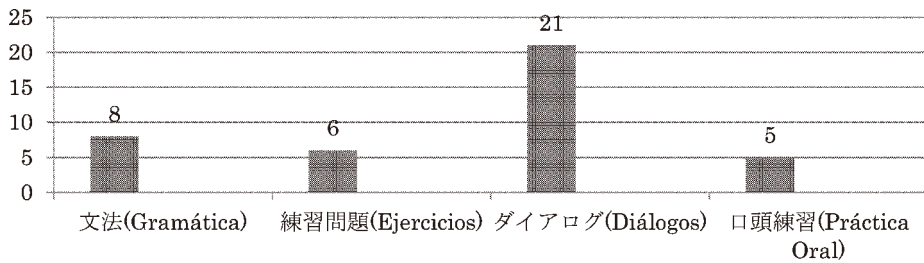
上の表が示すように、文法説明は今ぐらいの分量（各章2ページ）か、さらに詳しいほうが望ましいと学生は考えている。ところが、教科書を出版している複数の出版社の編集者は例外なく、文法事項の記述に関する注意点として、分量を絞り簡潔にすること、枝葉的なことは巻末の補足に回すことを提案する。これは、文法説明が多ければ多いほど、授業が教科書に拘束されてしまい、授業の残り時間や学生のレベル、教員の方針に合わせて流動的に授業内容を調節することが難しくなるためである。その結果、教科書に足を取られるリスクを回避するために、冗長な教科書の採用を避ける先生が多いらしい。また、文法的な説明をほぼ全面的にカットした教科書もあり⁹、その場合、文法説明をリンクしたウェブサイトの説明を載せる場合もあるが、そうではなく、教科書に説明が書いてあると教科書を当てにして授業を聞かない学生が出るとの理由で、記述を最小限にしている教科書もあると聞く。

ところで、北大では全学教育の方針として、「単位の実質化」を唱っており、学生の自宅学習、予習を非常に重視している。そのような場合、教科書に記載されている説明だけで一定の理解が可能な教科書でなければ、学生が予習に困難をきたすか、教科書以外の参考書などを購入する必要が出てくることになる。また、全クラスが毎学期、同一教材で、同じ試験範囲を学び、統一試験まで行う現在の制度下においては、教える内容（＝説明の詳しさや扱う例文の量）がクラスによって異なるようでは公平性に支障をきたす。それゆえ、北大では、ある程度の量の文法事項の説明が教科書に記載されていることが学生に求められているし、統一教科書は、そのような性格のものである必要があると考えられる。

4. 4つのセクションで、一番印象に残ったセクション、面白かったセクションはどれですか？

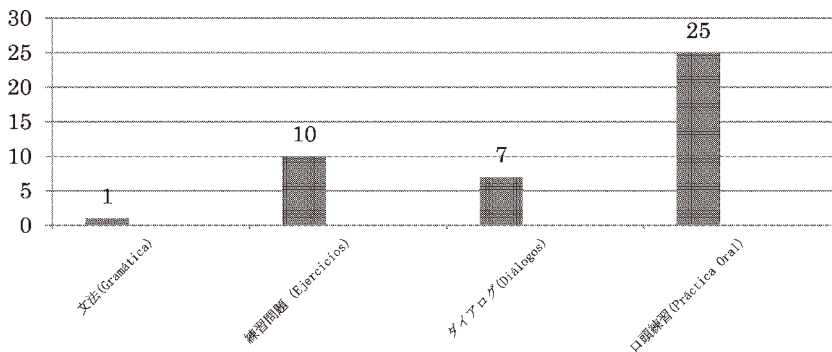
上述の問いの1において、学生が最もよく見るページは文法のセクションであることが分かったが、だからといって文法セクションが面白いと思っている訳ではなく、学生にとって興

9 『ディメロ』(2007)はその代表である。



味深く、印象的なセクションは、「ダイアログ」であることがわかった。現在使用中の教科書における「ダイアログ」は、日常的な表現を交えた、日常的な一場面を想定した会話の形式を取りながら、スペイン語圏の文化や社会を紹介するようなセクションとなっている。教科書の前半の章では、自己紹介、レストランでの注文、買い物など、初歩的かつ実用的な表現を学び、後半の章では、会話形式を取りながらも、セゴビアの水道橋、バルセロナのガウディ建築、グラナダのアルハンブラ宮殿などを紹介する形を取っている。従って、アンケート調査の結果から、学生は、すぐに使える表現を学びたいと思っているだけでなく、スペイン語圏の国々の生活や街並みなどの文化や社会に関する情報を提供するようなダイアログを期待しており、その内容に興味を持ち、印象深いと感じていると考えられる。従ってダイアログは、表現が、リアルなネイティブの会話の再現であったり、そのまま暗記して使えるフレーズばかりである必要はなく、ダイアログの形をとった講読としても、十分に受け入れられると考えられる。

5. 4つのセクションで、一番印象が薄かったセクション、あるいは好きでなかったセクションはどれですか？



文法や筆記形式の練習問題が最も好まれないのではないかと筆者の予想に反して、アンケートの結果は、口頭練習のページが最も好まなかったこと、あるいは印象が薄かったことを示している。とはいえ、筆者が例年4月に各クラスの履修者へ10年前から行っているアンケート(選択肢からの択一式)の結果において、授業で扱うことのうち最も関心が無いこととして、アクティビティを選ぶ学生が常に1位にあることと矛盾しない¹⁰。授業開始時である4月の回

答結果と、一年間学んできた最終段階である年度末のアンケートで示された結果に一貫性があり、変化が無かったことは注目に値する。

口頭練習では、何らかの具体性のある状況を与えられて、モデルに従って文を作り相手に伝える練習を口頭で行うものであり、実際はその章で学んだ重要表現や文法事項を繰り返し言ってみて、口頭で覚えるための練習なので、練習問題 (Ejercicios) のセクションの不足分を量的に補足するだけでなく、質的にも補足するものとなっている。しかしこのアンケート結果は、大なり小なり学生が、このような練習の重要性を認識していないことを示しているとも考えられる。あるいは、たとえ学生が意味ある練習だとわかっているにもかかわらず、座って授業を聞いているだけではだめで、必ずペアを組み、共同作業をしなければならないことに加え、行動する (声に出して言う、横や斜めに座っている練習相手の方に自分が移動する、など) 必要があるために、口頭練習はわずらわしい、おっくうであるとの記憶が残るとも考えられる。ペア練習は特に、教員主体ではなく学生主体の学習であり、クラスメートとの一体感を得る機会ともなり得ることや、実際のペアでの練習の場面では、ほとんどの学生が楽しそうに練習していることを考えると¹¹、なぜ「印象が薄く、好きではなかったのか」を問うための更なる調査が必要であり、これは今後の課題としたい。

〈3. 授業で扱う内容：語学中心か、文化や社会も必要か？〉

次にこの節では、授業は語学の勉強だけをするところと期待されているのか、それとも言語 (文法や会話など) 以外の地域に関する知識の伝達も期待されているのかなど、語学と語学の拡大領域の関係を問うアンケート調査の結果を検討する。このアンケート調査は、新学期開始から1か月程度が過ぎた時点で行ったものであり、アンケートの回答者数は191名であった。

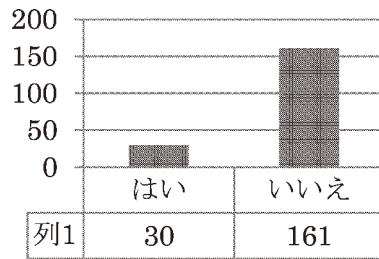
前節で見たように、学生がダイアログ部分を最も印象的であると感じたことをアンケートの結果が示したことを受け、この二つ目のアンケートでは、文化や社会などの言語的知識以外の知識、即ち社会や文化に関する情報提供を学生が望んでいるとの仮説に基づき、以下のアンケートを実施して、その詳細を検討した。それぞれの質問項目と回答結果を以下に見て行きたい。

1. あなたは大学の「スペイン語」の授業では、スペイン語という言語のみを勉強するべきだと思いますか？

まずは上記の仮説が成り立つかをアンケートで確認した。アンケートの結果、語学だけでなく、それ以外のことも学ぶ必要があるとした学生が84%となった。このことからダイアログに対する関心の鍵は、ダイアログのセクションに含まれる文化情報に多分に負っていると考え

10 一例として、岡田敦美 (2007)、75-76頁を参照のこと。

11 Martínez Martínez (2001) も、集合的な文化特質を持った日本人学生にはペアワークが適しているとの仮説に基づき学習ストラテジーの研究を行った。



ことができると思われる。なお、次の設問2において、「スペイン語の授業ではスペイン語だけを扱うのでよい」とした学生に、その理由を聞いた。

2. 「はい」と答えた方にお聞きします。それはどうしてですか？（回答記述式）

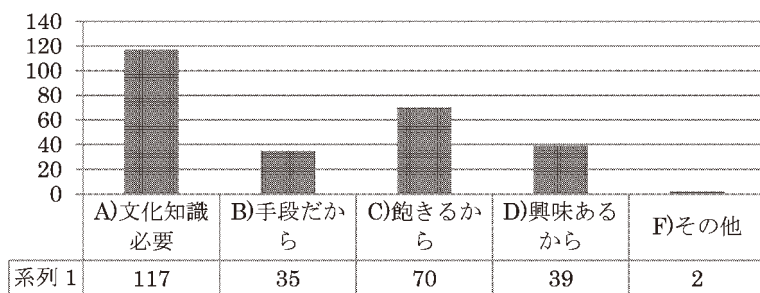
- ✓ スペイン語の授業だから 4
- ✓ 他の言語も同時に学ぶと混乱するから 7
- ✓ 言語面だけで時間的に手いっぱいだから 9
- ✓ 言語の取得に力を入れ、将来に役立てたいから 2
- ✓ まずはスペイン語の基礎を固めるべきだから 4
- ✓ ある程度言語を学ばおのずと文化面への興味に発展するから 2
- ✓ ことばにしか興味が無いから 1
- ✓ 高校でやったから 1

質問の趣旨を誤解していると思われる回答（同時に2言語も学べない、など）や、意味の不明だった回答（高校でやったから、など）を除くと、言語の学習に集中したいという積極的な理由のほか、語学だけで大変なのにそれ以上のことにまで当面は手が回らない、という学習上の能力限界の主張が最も多かった。他に、まずは言語、次に文化的な知識を深める、という段階を踏むべきである、との学習ストラテジーの観点による意見もあった。杓子定規に「語学の授業のはずだから、言語だけで十分」とした回答は4名に過ぎず、文化や社会に関する問題が定期試験に含まれるといった実践面での負担が増えない限り、文化や社会についての学習も、一定程度含まれることがほぼ全員に期待されていると言えるだろう。

3. 「いいえ」と答えた方にお聞きします。言語としてのスペイン語に限定した勉強では十分ではないと考える理由を選んでください。（複数選択可）

- A) 文化や社会の知識はスペイン語を理解するうえで必要だから
- B) 語学は文化と社会を勉強する手段であると位置づけられると思うから
- C) 現実問題として90分間語学の授業が続くのでは飽きてしまうから
- D) 少なくとも自分は言語としてのスペイン語以上に社会や文化に興味があるから
- E) その他

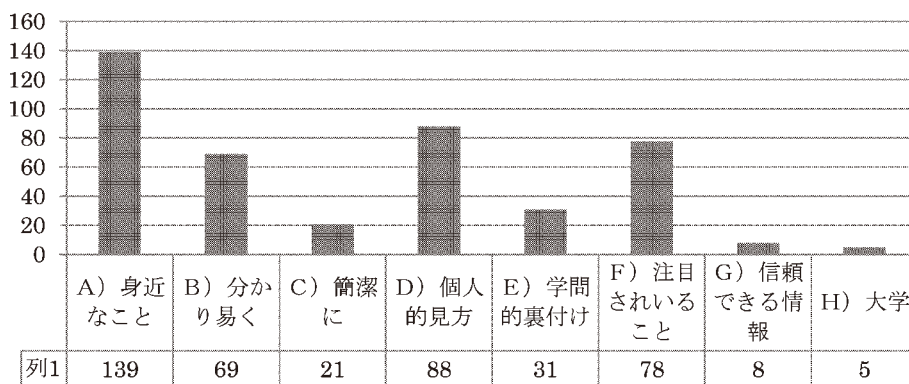
選択肢C)にある、言語の勉強ばかりでは飽きてしまうから、気分転換として文化や社会に



関する説明があるとよいとする選択肢を除き、A) B) D) の選択肢は、それぞれ論理が少しずつ異なるものの、文化情報が授業で提供されることに積極的な意味を見出しているものである。択一選択ではなく複数選択可の問いであるため、選択肢C)を選んだ者の多くも、A) B) D) を選択している。言葉のしくみを教えるだけではなく、スペイン語諸国の地域に関する知識が授業で提供されることが、単なる息抜きではなく、必要なことと広く受け入れられていることがわかる。

4. スペイン語の授業内であなたが期待する「文化や社会に関する情報」とはどのようなものですか？（複数選択可）

- A) 難しいことよりも、身近なことについて知りたい。
- B) 本当は難しいことであっても、分かりやすく説明してほしい。
- C) 何ごとも簡潔に、一言、二言で説明してほしい。
- D) 教員の個人的な見方、ものごとの解釈、経験を語ってほしい。
- E) 客観性や、ある程度の学問的な裏付けのあることを語ってほしい。
- F) 最近議論されたり、注目されていることについて知りたい。
- G) 専門家やジャーナリストによる信頼できる情報、常識的な見解を踏まえるべきだ。
- H) 大学の授業なので、どの先生も学問的な根拠のある話をしていると思っていた。



大多数の学生が授業で提供してほしいと思っていることは、身近なことにに関する情報であり、「難しいこと」——文学や哲学、政治経済などであろうか——よりも、まずはふつうの人々の日常生活をイメージできるような情報であるということである。一方で、分かり易く説明される限りは「難しい」話も知りたいと思ひ、特に最近議論されていることや、注目されている話題には付いていきたいと考えている学生が半分以上に上る。大きなニュースや時事問題、経済状況、などがここに含まれるだろう。

筆者にとって注目に値すると思われたのは、D) E) G) H) の選択状況が示す、教員個人の見方や解釈を聞きたい、という意見が他の選択肢を大きく上回る事実である。授業で提供される知識には通常、学問的裏付けがあるということ(E)、専門家の間で一定のコンセンサスを得ている常識的な見解を踏まえているのであり、思いつきの根拠希薄なコメントではないこと(F)は、大学の語学授業を担当している多くの教員が、対象地域の地域研究の専門的な研究者であることから明らかかと思っていた¹²。しかしアンケートの結果からは、学生がそのような認識を持っているようには思えないのである。そして、客観性や学問的な根拠や通説よりも、むしろ教員の主観的なコメントを望んでいるのである。

一つの考え方としては、授業とは、語学の授業であれそれ以外の授業であれ、専門家の目に映ったアクチュアルな状況を、率直に口頭で述べる場であり、より本音の、生の声が聴ける場であるという、漠然とした期待がある可能性があるということである。本に書いていない、より新しいこと、本には書いていない全体性が、誰にでもわかる平易な言葉で説明されることが期待されているということとも考えられる。選択肢F)を選んだ者、即ち、最新の議論や注目されていることについて聞きたいと考えているものが少なくないという事実が、それを傍証しているとも考えられる。

一方で、たとえ分かり易く噛み砕いて説明したとしても、研究者でもある語学教員の場合は、一片の新聞記事程度の論拠から、何年にもわたる読書や学説の把握に至る、幅広い根拠を踏まえたうえで説明している事実が、学生には、教員の想像以上に軽視、無視されていることを、このアンケート結果は示している。果たして語学の教員は、その言語を分かり易く、あるいは楽しく教えることさえできればよいのか。極言すれば、大学の語学教員は、外国語を操ることができ、その言語が話される国に住んだことがあるというだけでよいのか。だとすれば、今後の語学教員の任用は、学歴不問のものとするべき、ということになる。

日本全国に散らばるスペイン語教員の多くは、地域研究者である。というより、スペイン語圏の地域研究者の殆どが、スペイン語教員である¹³。これはスペインやラテンアメリカの文化や

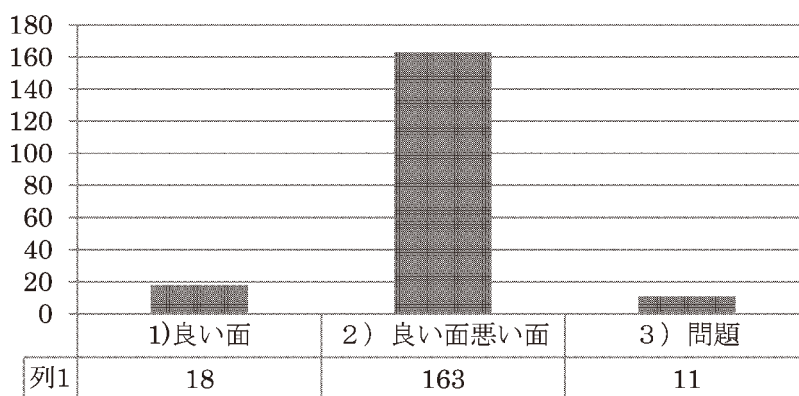
12 この点は、大学の語学担当教員の採用基準において、専任教員であれ非常勤教員であれ、その言語が公用語となっている地域について人文社会科学の分野で(伝統的には文学であった)大学院で研究者として養成された者のみが実質的な有資格者と考えられていることからにも裏付けられている。

13 渡邊暁(2012)は地域研究者の果たし得る語学教員としての役割について論じている。

社会に関する研究者が、他の一般教養科目の中の語学教員と異なる状況に置かれているからである。フランス語や中国語を教えることができる研究者には、一般教養科目の語学以外に、文学部の文学や歴史関連のポスト、法学部の政治学関連などの、数多くの専門科目のポストが開かれている。その他にも一般教養科目としての非言語科目のポストや、国際系学部のポストもある。しかしスペイン、ラテンアメリカを研究対象とする研究者に開かれている文学部や法学部の専門科目のポストや一般教養科目の非言語科目のポストは、日本全国でほぼ皆無に近い。このような状況で、社会科学から人文科学に至るあらゆる分野の研究者が、日本全国でスペイン語教員のポストについている。にもかかわらず、今回のアンケート調査が示す学生の認識によれば、研究者である語学教員が自分がその地域を専門とする研究者であることや、語学の授業内で紹介していることは論拠や学問的根拠があることを折に触れて学生に伝えない限り、教員の研究分野が何であるかに関心を持つ一部の学生を除いて、学生は、教員の文化や社会に関する説明が、専門知識に裏付けられたものであることを知らないままとなるだろう。地域研究の研究者でもある語学教員はそのことを肝に銘じ、自らの専門性を意識的に学生に伝える努力が必要となるだろう。

5. スペイン語の授業で触れるスペイン語圏の文化や社会の扱いは、どうあるべきだと思いますか。

- 1) スペイン語圏の社会や文化の良い面、優れている面を教える。
- 2) スペイン語圏の社会や文化について、良い面も悪い面も公平に教える。
- 3) スペイン語圏の抱えている問題（特に現代の）についてきちんと教える。



上記のアンケート項目4（授業で提供されることを期待する文化や社会に関する情報）と関連するアンケート項目として、授業で扱われるべきスペイン語圏の社会や文化に関する情報は、どうあるべきなのか、優れている面を取り上げ教えるべきか、それとも良い面も悪い面も教えるべきか、を問う目的で質問した。結果は、公平に両面を教える

べきとする学生が殆どで、地域研究者として授業を担当している筆者としては、安心したというのが正直なところである。

周知のように、今日の大学の初習外国語の授業は、将来、文学や哲学、社会科学の学問のためのツールとしてその言語を学ぶ学生のみを対象としているのではなく、グローバルな視野を持ち、教養を身につけるための授業であるとともに、実践的でコミュニケーション重視の授業、アクチュアルな知識を重視した内容が重視されるようになってきている。そのため、選択科目としての語学の授業のみならず、初習外国語科目（必修科目）としての授業でも、近年は、多様なバックグラウンドの教員が授業を担当することが望ましいと考えられるようになってきている。ビジネスや国際協力、外交などの現場でスペイン語に触れた経験を持つ教員や、ネイティブの教員などがその代表的なものである。これらの教員の授業によって、学生は、伝統的な研究者、とりわけ豊富な語彙を持ち、表現に鋭い古典的な文学研究者でもある語学教員と異なる観点やスキルを持った教員から、今までと異なる教授法や、スペイン語の世界の日常や、スペイン語の世界と日本との関わりのあり方、日常的表現などについて学ぶことができるようになった。

その中で、これらの教員と相互補完的な存在として、対象地域の地域研究者はどのような役割を語学教育の場で果たすことが可能だろうか。スペイン語の文化や社会を研究対象としている教員は、スペイン語圏の地域は、研究対象として客観的に扱うことを当然と考えており、また研究者による通説を把握している。更に日本人の教員の場合は、スペイン語圏の文化や社会のあり方は、自分の人格と切り離されたものと考えることができ、かつ、その言語文化圏の社会の欠点や、伝統的に他国から批判されてきた点や国内での論争、学生を含む日本人に共有されてきたステレオタイプなどを知っている。そのような知識を踏まえたうえでこそ対象地域に対する先入観を解体することも可能であるし、逆に言えば、スペインやラテンアメリカの在り方について、毎度毎度、教師が好意的な解釈に帰結するのでは説得力が無く、かえって恣意的な印象を与え、信頼を失うだろう。語学の授業はその地域を礼賛したり、良い面だけを教える場ではなく、日本を含めてどの国も、欠点と長所を併せ持っていることを知る場なのではないだろうか。

〈むすびにかえて〉

本稿では、北大の統一スペイン語教科書を作成するための予備的調査として、北大の学生が期待する授業内容や教科書の在り方をアンケートにより調査し、その結果を考察したものである。その際、スペイン語では、CALL 授業ではなくネイティブ教員による授業が全クラスで最低半期1コマ提供される授業設計をしている以上、統一教科書が、コミュニケーションあるいは口頭練習を取り入れたタイプのものとなることを前提としていた。更に調査対象は、特定の

大学の学生であるため、他大学の学生から同じような結果が得られるとは限らないことを念頭に置きたい。

当該アンケート調査から導き出された結論は、全体的に北大の学生は、堅実で伝統的な学習方法を好む傾向があり、ただ簡単で楽な授業を求めているのではないということである。ある程度詳しい文法の説明を受け、一定量の練習問題によって、理解を確認したり定着をはかることを望んでおり、授業では、難しい話ばかりされるのは困るが、専門家から見た対象地域についてのツボは押させて教えてほしい、と思っているふしがある。また、大学の授業はカルチャーセンターでの市民交流の場ではないことも心得ているらしく、対象地域の一つの面ばかりを紹介するような社交辞令的な内容である必要はないと考えている。

また、理系の学生が多いにもかかわらず、外国語の技能的側面ばかりに目が行くのではなく、語学の授業において、対象地域の文化や社会についての知識をも得たいと考えている。このような結果は、2002年の北大初習外国語に関するアンケート調査の結果を踏襲するものである。

※ 本研究は、平成 23 年度北海道大学総長室事業推進経費によるプロジェクト研究経費、及び平成 23 年度北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金の支援を受けました。ここに謝意を表します。

〈参考文献〉

- 江澤照美「ヨーロッパ共通参照枠とセルバンテス協会のカリキュラムプラン——日本のスペイン語教育への応用」、*イスパニカ*、vol.54、2010年、pp.211-232。
- 岡田敦美「大学における語学教育に関する学生の意識とその分析：スペイン語の場合」、*メディア・コミュニケーション研究*、第53号、2007年、pp.69-83。
- 小嶋英夫・尾関直子・廣森友人（編）『成長する英語学習者、学習者要因と自立学習』、大修館書店、2010年。
- 小寺生夫（編）『第二言語習得研究の現在、これからの外国語教育への視点』、大修館書店、2004年。
- ゴンサレス、フリア／ワーヘナル・ローベルト（編）、『欧州教育制度のチューニング：ポローニャプロセスへの大学の貢献』、明石書店、2012年。
- 佐藤俊一・竹中のぞみ・宇佐見森吉・清水賢一郎「学生アンケートによる初習外国語に関する意識調査——分析と考察——」、『教官・学生アンケートにみる全学教育外国語に対する意識調査と北大生の英語力の変化』（伊藤章・佐藤俊一編）、2002年、北海道大学言語文化部、p.79-93。
- タイラー、ウルリッヒ『ヨーロッパの高等教育改革』（*Higher Education Reform in Europe*, Ulrich Teichler, 2006）、玉川大学出版部、2006年。
- 寸田知恵「日本のスペイン語教育における授業内容の標準化の必要」、*関西外国語大学外国語教育フォーラム*、第9号、2010年、pp.53-66。
- デル・ブラド、エウヘニオ／斉藤華子／仲道慎治、『スペイン語のリズムで』、同友社、2007年。
- 東京大学スペイン語部会『*ディメロ*』、朝日出版社、2006年。
- 中島さやか；落合佐枝；菅原昭江；大森洋子「日本の大学における初級スペイン語教育のための」教科書評価の枠組み（試案）と『*Entre Amigos*』のケース：コミュニケーション能力獲得を目指した授業で、』*明治学院大学教養教育センター紀要カチュール*、5 (1)、2011年、pp.183-200。
- 福嶋教隆「日本語話者を対象とするスペイン語教育の動向」、*外国学研究*57号、2003年、pp.1-32。

- 吉島茂；大橋理枝（編、訳）、『外国語教育Ⅱ——外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ参照枠——』（*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*, Council of Europe）、朝日出版社、2004年。
- 渡辺暁「地域研究者として教える第二外国語：ラテンアメリカ地域研究とスペイン語のあいだ（教育の部）」、青山スタンダード論集7、2012年、pp.107-122。
- Aristimuño, Ignacio, “Los métodos de la enseñanza del Español como Lengua Extranjera”, 言語文化、12(4)、pp.691-716、2010.
- Martínez Martínez, Inmaculada, “Nueva perspectivas en la enseñanza- aprendizaje de ELE para japoneses: la concienciación formal”, tesis de doctorado por la Facultad de Filología, Universidad Complutense de Madrid, 2001.
- Nunan, David, *Research Methods in Language Learning*, Cambridge University Press, 1992.

(2012年11月14日受理、2013年1月17日最終原稿受理)

《SUMMARY》

Texts, Classes, and Learning of Social and Cultural Context of Spanish World.

Atsumi OKADA

This article discusses the results of two questionnaires, which were designed to ascertain Hokkaido University students' opinions and needs concerning their Spanish cultural and language learning experiences. The questionnaires included information related to the contents of the language classes and of the associated Spanish language textbook. The purpose of this research was to determine the appropriateness of teaching and learning practices associated with the use of the textbook in order to design the new textbook for 2013. The analysis of the results consists of student profiles, and their needs and opinions related to the study of different social and cultural contexts from around the Spanish-speaking world. It also focuses on how students utilized this textbook for self-study outside of the classroom and the students' perceptions of the appropriateness of the use of this textbook in the classroom contexts.